

日韓両言語における動詞の意味分析

ーアスペクト的観点からー

鄭世桓, 上原聡 (東北大)

1 はじめに

本研究はアスペクト的補助動詞の意味・用法を考察する研究の一貫として行う動詞の意味分析である。本動詞に付随の意味を添えることが補助動詞の第一の役割であるとすれば、本動詞と補助動詞を切り離して考えることはできない。何故なら、結合する本動詞の語彙的な意味が現実世界の出来事のどの側面を表わすかによって、補助動詞の意味・用法に異なる傾向が見られるからである。たとえば、

- (1) 太郎はご飯を食べている。
- (2) 太郎は死んでいる。

は、それぞれ動詞が同じテイル形式をとっている。日本語の補助動詞テイル形式は基本的に「継続」を表わすとされているが、本動詞の語彙的な意味が動作を表わすか、それとも変化を表わすかによって、前者のテイル形式は動作の進行を、後者のテイル形式は変化後の結果状態の継続を表わすこととなり、テイル形式の意味・用法に違いが見られる。動詞の語彙的な意味の考察が必要となるもう一つの理由は、補助動詞の種類によって、結合する本動詞の種類が制約されるということである。前述したテイル形式の場合は時間的展開性を持つ出来事を表わす動詞であれば結合が可能となる。しかし、テオク形式は出来事へのもくろみを表わすとされるものであるため、テオク形式が表わす出来事とは意志的動作が前提となり、無意志的な出来事を表わす動詞とは結合することができない。

- (3) 太郎はご飯を食べておく。
- (4) *太郎は死んでおく。

このように、補助動詞の意味・用法を考える際、本動詞の語彙的な意味の分析が何らかの形でキーワードになることが予想できる。特にアスペクト研究において、従来の研究でも動詞の語彙的な意味に基づいた動詞分類が行われ、本動詞と補助動詞との関わり的重要性が強調されている。本研究では、アスペクト的観点から日韓両言語における動詞をそれぞれ分析し、その語彙的な意味に基づいてカテゴリー化を行う。さらにカテゴリー化された動詞類が、それぞれ補助動詞の文法的な意味にどのように影響を及ぼすかという根拠を見出すことを目的とする。

2 先行研究

2.1 金田一春彦 (1950)

継続動詞 / 瞬間動詞

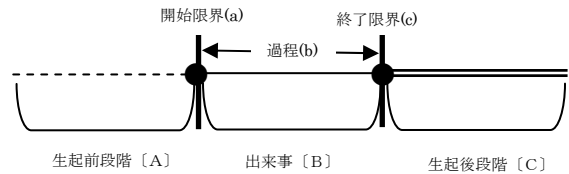
2.2 工藤真由美 (1995)

(A)外的運動動詞 : (A-1) 主体動作・客体変化動詞 / (A-2) 主体変化動詞 / (A-3) 主体動作動詞

3 出来事について

ここでは、現実世界の流れの中で起こる現象の中、言語(ここでは動詞に限る)が表わす現象のある側面を「出来事」と称する。動詞と出来事との関わりを考えるに当たり、次の3点に注目する。まず、出来事のあり方である。出来事は様々な形で存在するが、大きく「動作」「変化」「状態」に分けることができる。この中で、「動作」と「変化」は時間的流れに沿って生起する動的なものであり、「状態」は時間的展開性のない静的なものである。本研究はアスペクト的観点を中心として動詞の語彙的な意味を考察するため、「状態」を表わす動詞は対象外とする。二つ目は、出来事のあり方によって、出来事の成立に関与する必須要素を考える必要がある。これをここでは「関与者」と称する。関与者には、出来事を直接主導する「主体」と、主体が出来事を主導するに当たって必要な媒介物としての「客体」が考えられる。最後に、時間の流れの中で生起する出来事のアスペクト的構造について考える。出来事が動作の側面を表わすものか、それとも変化を表わすものかによ

て、その構造は異なる。しかし、典型的な構造を考えてみると、大きな区切りとして出来事が生起する前の段階、出来事が生起する段階、出来事が生起した後の段階に分けることができる。そして、出来事が生起する段階は、更に出来事が始まる時点(以下「開始限界」と称する)と、終わる時点(以下「終了限界」と称する)、そして始まる時点から終わる時点までの間、つまり出来事の過程として進行している時点(以下、「過程」と称する)が考えられる。出来事の典型的なアスペクト的構造を図にすると次の通りである。



【図1】出来事の典型的なアスペクト的構造

※ 以下、便宜上、各部分をアルファベットで表記する。

4 動詞分類

まず、動詞の意味分析を行うに先立って、3節で取り上げた出来事のあり方や関与者の関わりから、どのように動詞をカテゴリー化できるのかを考える。3節で出来事のあり方を動作と変化とに二分し、両者をそれぞれ現実世界の現象における一つの側面として扱うことができた。このようなことから、動詞を大きく動作という出来事を表わす動詞と変化という出来事を表わす動詞とに分類することができる。そして出来事への関与者間の関係を考慮にいれて細かく分類すると、動作動詞の場合、主体の単なる動作を表わす動詞(以下「単純主動動詞」と、主体が客体へ何らか働きかけることが目的である動作を表わす動詞(以下「主動客変動詞」と)に分類することができる。それに対して、変化という出来事を表わす動詞は主体の変化を表わす動詞このタイプしか考えられない。

4.1 日本語動詞の意味分析

4.1.1 主動客変動詞

- (5) 開ける、折る、変える、乾かす、切る、崩す、壊す、冷ます、染める、倒す、潰す、漬す、落とす、刻む、削る、縛る、炊く、たたむ、作る、運ぶ…

この動詞類は工藤(1995)での「主体動作・客体変化動詞」とほぼ同じである。基本的に主体の動作を表わすものであるが、その動作とはある対象が変化を蒙ることを目的とする動作を指す。つまり、明示的には主体の動作を表わす動詞であるが、暗示的にはある対象に対して働きかけ(=動作)、その働きかけがその対象に何らかの影響を及ぼすことを表わすものである。他動詞の典型的な姿を持っている動詞だといえる。そのため、関与者は基本的に動作を行う主体と、動作によって働きかけられる対象の客体が必ず一個以上が必要となる。そして、主体による客体への働きかけがあるため、殆どが意志的動作を表わすものである。それ故に、これらの動詞類が表わす出来事のアスペクト的構造は【図1】であげた出来事の典型的なアスペクト的構造と同じである。

これらの動詞が表わす出来事は開始限界と終了限界があり、その間には時間的幅としての過程の設定が考えられる。このような性質が、文法的には次のように現れる。まず、動詞が出来事の開始の時点を表わすシハジメル形式をとって、(a)を表わすことができる。

- (6) 窓を開け始める / 始めた
- (7) 布団をたたみ始める / たたみ始めた

動作の過程である(b)は出来事の継続を表わす形式「テイル」をとって、動作が進行していること、つまり客体への働きかけが続いていることを表わす。

- (8) 窓を開けている / 開けていた
- (9) 布団をたたんでいる / たたんでいた

そして、スル形式で段階[B]の出来事を一まとまり的に

取ることによって、出来事の終了まで表わす。

(10) 窓を開ける／あけた

(11) 布団をたたむ／たたんだ

この場合、前述したように、動作の終了限界となる(c)は、暗示的には客体の変化が成立する時点であるため、これらの動詞と対を成している自動詞や、対を成している自動詞が存在しない場合は受身形式で(c)を表わすことができる。

(12) 窓が開く

(13) 布団がたたまれる

そして、これらの動詞がテアル形式をとって動作終了後の結果の領域である段階〔C〕を表わすことができる。

(14) 窓が開けてある

(15) 布団がたたんである

この場合、終了後の結果の領域であるため、その結果が現れる客体が主語の位置に付くこととなり、動作の主体はその姿を隠す。これと並んで、動作終了後の結果の領域は、言い換えれば変化の領域となるため、対を成している自動詞、もしくは受身形式がテイル形式をとって、段階〔C〕を表わすこともできる。

(16) 窓が開いている／開いていた

これら主動客体動詞における動作の性質と変化的性質の関係は談話の中でも読み取ることができる。例えば、

(17) 窓をあけましたか。

という質問に対する答えとして

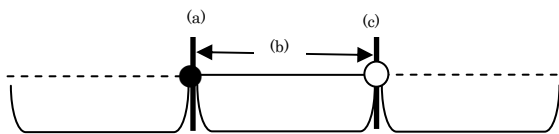
(18) はい、開けました。

(19) はい、開きました。／はい、開いています。
のように二通り答えることができる。用例(13)は動作の終了そのものを積極的に表わすものであるのに対して、用例(14)は変化を前面に出すことによって動作の終了を表わすものである。つまり、主動客体動詞が表わす出来事における主体の動作と客体の変化の関係とは切り離すことのできない関係にあるといえよう。

4.1.2 単純主動動詞

(20) 歩く、泳ぐ、飛ぶ、動かす、いじる、嗅ぐ、聞く、見る、触る、たたく、殴る、指す…

これらの動詞類は工藤(1995)で「主体動作動詞」に相当するものである。動作という出来事を表わす点では主動客変動詞と同様であるが、違いはこの動詞類が表わす出来事は主体による動作の仕方や、様態を表わすものであって、対象への働きかけには無関心な出来事を表わす動詞ということである。そのため、この動詞類は動作の終了に対して消極的である。しかし動作が終了する時点の存在そのものを否定しているのではない。この動詞類が表わす出来事も主動客変動詞と同じく可視的、かつ具体的な動作であるため、終了するか、しないかを比較的明確に認識できる出来事である。以上のようなことから、まず出来事への関与者は動作を行う主体だけでも成立する場合もあれば、動詞によってはヲ格をとる客体が必要な場合もある。しかし、単純主動動詞における客体とは主動客変動詞のそれとは異なる。主動客変動詞における客体は主体の動作が客体の変化につながり、出来事の中で主役としての役割を担っている。それに対して、単純主動動詞における客体は変化の対象ではないもの、もしくは現実世界で実際動作によって変化する可能性があるとしても、動詞の語彙的な意味にはその変化までは含意しないものである。つまり、動作が成立するにあたって助役として機能する仲介物に過ぎない。意志性に関しては、客体への働きかけを目的とする出来事ではないため、意志的な動作もあれば、無情物の外的運動や、自然現象など無意志的な動作を表わす場合もある。



〔A〕 〔B〕 〔C〕

〔図2〕 主動動詞のアスペクト的構造

(a)から(b)までは主動客変動詞と同じ構造を持っていて、文法的性質も変わらない。

(21) 私は歩き始める／歩き始めた

(22) 私は歩いている／歩いていた

主動客変動詞との違いは(c)から始まる。主動客変動詞における(c)は前述したように動作が終了する時点であるとともに、客体の変化が成立する時点でもある。そのため、一つの出来事の中でも(a)が持つ意味合いと(c)が持つ意味合いはそれぞれ異なる。それに対して、単純主動動詞における(c)は動作が終了する時点で、動作しない状況から動作する状況の境目となる(a)と動作する状況から動作しない状況の境目となる(c)とがそれぞれ持つ意味合いはそれほど変わらない。そのため、この場合無票のスル形式は一まとまり的に動作の終了までを含む出来事を表わすが、主動客変動詞と比べて終了を積極的に表わしてはいない。

(23) 私は歩く／歩いた

しかし、動作を時間的、あるいは空間的、量的に限定する手続きによって終了の時点を経験的に表わすこともある¹⁾。

(24) 私は午後3時(仙台駅)まで歩く／歩いた

動作の終了に無関心であるというこの性質は、段階〔C〕を表わす文法的措置がないという点からも分かる。つまり、単純主動動詞は、動作前の段階〔A〕と動作後の段階〔C〕との違いを問題にしない、あるいは問題にする必要のない動作を表わす動詞である。そのため、これらは対を成している自他動詞や受身形式などの有無を論ずることに意味がない。ただし、単純主動動詞の中にも〔食べる／殴る／触る／降る…〕のような動詞は受身形式をとることのできるものもある。しかし、これらの動詞が受身形式をとる場合は、迷惑の受身というモダリティの意味を表わす場合が多く、主動客変動詞における裏表的なペアとは異なる。

(25) 太郎は雨に降られた

(26) 太郎は次郎に殴られた

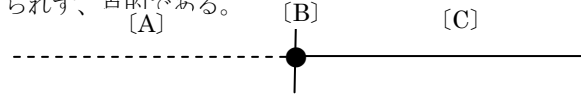
4.1.3 主変動詞

(27) 開く、行く、(医者)になる、折れる、変える、かぶる、枯れる、着る、切れる、死ぬ、壊れる、冷める、染まる、倒れる、潰れる…

この動詞類は工藤(1995)での主体変化動詞に該当するもので、その名づけ通りに主体が変化を蒙ることを表わす動詞である。この中で一部は、4.1.1 主動客変動詞と関連付けて、主動客変動詞と対を成している自動詞としてもうすでに言及したものである。工藤(1995)でも、この動詞類を「終了限界達成性=限界達成性」として捉えている。しかし、これは動作という出来事の観点から見れば終了限界であるが、変化という出来事の観点から言えば、ある対象の状態が新しい状態を迎える際の境目である。ここで、一つ考えるべきことは、主動客変動詞は、明示的には主体の動作そのものを、暗示的には客体の変化の成立も含意しているとした。それでは、主変動詞も主動客変動詞と並んで、暗示的に変化を引き起こす動作が動詞の語彙的な意味として含意しているといえるだろうか。結論を先にいうと、主変動詞は動作を前提にした変化だということまでは表わしていないと思われる。主動客変動詞は、動詞の結合価によって文の成分として変化の対象である客体が設定される。そして、動作の成立が変化の成立につながる。しかし、現実世界の現象における変化に何らかの動作が働いたとしても、主変動詞は文の成分として変化の主体以外は必須成分としない。これは、実際、現実世界での現象を考えてみても分かる。変化が必ず何らかの働きかけで成立するものとは限らない。例えば、殺すという現象は客体が死ぬという変化を引き起こすための動作だといえるが、死ぬという現象は必ず誰かが殺すという動作を起こしたから生じることだとは言いがたい。病気で死ぬ場合もあるし、事故などで死ぬ場合もある。この場合、病気や事故を一つの関与者として捉えるなら、変化の暗示的な意味とし

¹⁾ このような手続きを工藤(1999)では「外的限界づけ」と名づけている。

て動作が裏付けられているといえるだろうが、実際そこまで捉えない。つまり、主変動詞は主体の変化そのものを表わす動詞である。それ故に主変動詞が表わす変化は旧状態の終わりの時点でありながら、新状態の始まりの時点でもある。従って、変化の時点を開始限界、或いは終了限界だと決めることは難しい。主変動詞が表わす出来事のアスペクト的構造は、出来事に時間的幅、つまり過程性が認められず、占的である。



【図3】主変動詞のアスペクト的構造

主変動詞の場合、文法的にはスル形式で、段階 [B] を表わす。

- (28) 窓が開く／開いた
- (29) 太郎が死ぬ／死んだ

そして、テイル形式をとって段階 [C] を表わす。

- (30) 窓が開いている／開いていた
- (31) 太郎が死んでいる／死んでいた

(24) であげた主変動詞の中で、「着る、脱ぐ、はく…」など再帰動詞は、工藤 (1995) の分類でも主体の変化でありながら、主体の動作をも表わしている動詞として分類している。この場合、動詞が動作の側面をとるか、それとも変化の側面をとるかを決めることは難しいが、テイル形式をとる際主体が変化した後の状態の継続を表わす場合が多いため、変化という側面が中心になるといえる。しかし、これは話し手がどのような側面に注目するかによっては変化の側面を前面に出す場合もあれば、動作の側面を前面に出すこともあり得る。例えば、

- (32) 今日花子の服は何ですか。
- (33) 彼女はドレスを着ています。

という会話で、(29) は花子の状態を聞く質問であり、その答えとしてテイル形式は花子の服の状態を表わしている。この場合は変化後の状態の継続が前面に出ている。

- (34) 花子は今何をしていますか。
- (35) 彼女は今ドレスを着ています。

(31) は花子の現在の動的行動を尋ねる質問であって、それに対する答えとしての (32) は花子が着るという動作を進行しているという主体の動作を前面に出している例である。

4.2 韓国語動詞の意味分析

ここでは、4.1 で行った日本語動詞における意味分析を元にし、韓国語動詞の語彙的な意味を分析する。日本語と韓国語とは言語的 (文法的・語彙的に) に大変類似な性格を持っているため、述べ方としてかなり日本語動詞についての説明と重なるところがある。記述にあたり、説明が重なるところはなるべく簡略化し、日本語動詞と相違するところを中心として述べていく。

4.2.1 主動客変動詞

- (36) el-ta(開ける)、ceb-ta(折る)、bakku-ta(変える)、malli-ta(乾かす)、calu-ta(切る)、mwunettuli-ta(崩す)、cuki-ta(殺す)、…

韓国語における主動客変動詞は日本語とほぼ同じ性質を持っている。主体の動作によって客体が変化を蒙ることを表わす動詞である。そのため、出来事への関与者は動作を行う主体と動作の働きかけを受けて変化する客体となる。

文法的にはまずこれらの動詞類の第 1 語基の形と動作の開始を表わす kisicakha-ta 形式が組み合わさって、開始限界 (a) を表わすことができる。

- (37) chelswu-nun mwun-nul yelkisicakhan-ta / yelkisicakhayssa-ta

チョルスは ドアを 開け始める / あけ始めた (b) は継続を表わす形式の中でも出来事が進行中であることを意味する ko iss-ta 形式をとることで表わせる。

- (38) chelswu-nun mwun-ul yel-ko iss-ta / yel-ko iss-ess-ta

チョルスは ドアを 開けている / 開けていた また、出来事の段階 [B] を ha-ta 形式が一まとまり的に捉え、出来事の終了までを表わすこととなる。

- (39) chelswu-nun mwun-ul yen-ta / yel-ess-ta

出来事終了後の段階 [C] は日本語と同じく、出来事後の結果の状態、つまり客体の変化した後の状態を表わす領域であるため、主動客変動詞と対を成している自動詞か、それとも受身形式 hayci-ta 形式が a iss-ta 形式をとる形で表わすことができる。

- (40) mwun-i eylly-e iss-ta / eylly-e iss-ess-ta

4.2.2 単純主動動詞

- (41) ket-ta(歩く)、heyumchi-ta(泳ぐ)、wumciki-ta(動かす)、math-ta(嗅ぐ)…

韓国語の単純主動動詞の場合も日本語のそれと類似の性質を持っている。動詞が表わす出来事は動作の仕方や様態の側面を表わすもので、対象の変化などには無関心である。そのため、当然出来事の終わりにも消極的である。出来事のアスペクト的構造も日本語と同じ構造を持つ。文法的性質としては開始限界の(a)と過程としての(b)は主動客変動詞と同じである。

- (42) chelswu-nun ketkisicakhan-ta / ketkisicakha-yssa-ta

チョルスは 歩き始める / 歩き始めた (43) chelswu-nun ket-ko iss-ta / ket-ko iss-ess-ta

チョルスは 歩いている / 歩いていた 日本語の同じく、ha-ta 形式は一まとまり的に動作の終了までを含む出来事を表わすが、主動客変動詞と比べて終了を積極的に表わしてはいない。

- (44) chelswu-nun ket-nun-ta / kel-ess-ta

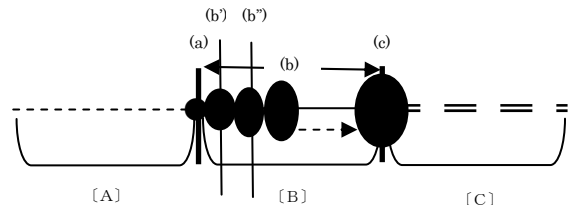
4.2.3 主変動詞

主変動詞においては日韓の動詞の間に若干の相違点が見られる。両言語とも主体の変化を表わすことには変わらないが、韓国語の主変動詞は変化の仕方によってさらに細分化されている。ここでは変化の仕方によって、韓国語の主変動詞を漸進的主変動詞と到達的主変動詞、瞬間的主変動詞に分けた。

【1】漸進的主変動詞

- (45) eylli-ta(開く)、cebbi-ta(折れる)、bakkwi-ta(変える)、malu-ta(枯れる)、…

漸進的主変動詞とは漸進的変化の仕方を取る出来事を表わす動詞である。漸進的変化とは、ある主体の状態が徐々に変わっていく仕方を取る変化を指す。例えば、ドアが開くということは、閉まっていたドアが 1 センチまで隙間ができること、そして、1 センチから 2 センチへ…と幅が変わることを表わす。このように、これらの変化はある未定の目標の限界を向かって同じ変化が繰り返されるのである。このように漸進的変化とは旧状態が新状態を迎い、またその新状態 (すでに旧状態) が新たな新状態を迎えるという変化を指す。



【図4】漸進的主変動詞のアスペクト的構造

この場合、変化の変化という繰り返しが相次ぐ出来事であるため、ある程度の時間的幅が設定できる。しかし、0 センチから 1 センチへ、1 センチから 2 センチへという変化はそれぞれ変化の程度が異なるとしても幅が狭い状態から広い状態に変化するということに関しては同様であ

る。つまり、過程(a)から過程(b)の間に存在する過程(b')も過程(b'')も主体が前の状態よりどれくらい変化したかという変化の程度が異なるだけで、このすべての過程が主体にとっては同類の変化であることには変わらない。漸進的主変動詞の文法的性質はまず状態の変化が始まる過程(a)は出来事が開始することを表わす *kisicakha-ta* 形式をとって、変化の開始限界の時点を表わすことができる。

- (46) *mwun-i yellikisicakhan-ta* / *yellikisicakhap-yss-ta*
 ドアが 開く・開始形式 / 開く・過去・開始形式

そして出来事の継続を表わす *ko iss-ta* 形式をとって、目標の変化に至っていないこと、つまり目標の変化に向かって状態の変化が進行していることを表わす。

- (47) *mwun-i yelliko iss-ta* / *yelliko iss-ess-ta*

ドアが 開く・出来事の進行 / 開く・過去・出来事の進行
 そして、*ha-ta* 形式をとって、(a)から (c)までの段階[B]を一まとまり的にとることによって、目標の変化に達すること、変化の完成を表わす。

- (48) *mwun-i yelli-n-ta* / *yell-eyss-ta*
 ドアが 開く / 開いた

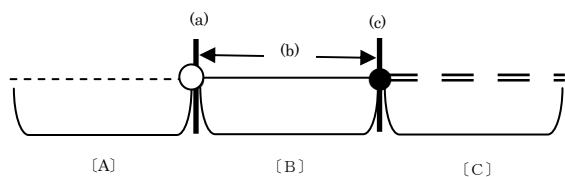
変化後の結果状態の継続を表わす段階[C]は *a iss-ta* 形式をとって表わす。

- (49) *mwun-i yell-ey iss-ta* / *yelli-ey iss-ess-ta*
 ドアが 開いている / 開いていた

【2】到達的主変動詞

- (50) *ka-ta*(行く)、*o-ta*(来る)、*tolao-ta*(帰ってくる)、*ollaka-ta*(上がっていく)...

到達的主変動詞とは動詞の語彙的な意味に変化の到達点が設定されている場合である。この場合、主に移動動詞が多い。移動動詞は主体の動作とともに主体の位置変化をも含んでいる。つまり、動詞の語彙的な意味には動作の側面と変化の側面が共存しているものである。しかし、この二つの側面が両立している動詞を主変動詞として分類したのは、移動動詞は、主体の移動の仕方より、主体の移動による主体の位置変化が主な目的であるからである。そのためこの動詞類が表わす出来事への関与者には主体の位置変化の対象の到達点が設定され、これが漸進的主変動詞と異なる点である。つまり、主体の動作によって、主体に(位置)変化が起こるが、到達的主変動詞が表わす変化とは到達点に達したときの位置だけを表わすもので、到達点に至るまでのプロセスの中で変化が相次いで起こるとしてもその変化までは表わさない。



【図5】到達的主変動詞のアスペクト的構造

この場合、過程(a)の設定が過程性のある他の動詞と比べて難しい。なぜなら、到達的主変動詞とは動作の側面も変化の側面も両立するため、過程(a)を動作の開始なのか、それとも変化の開始なのかを決めることが難しいからである。それ故に、出来事の開始を表わす *kisicakha-ta* 形式とは結合しない。しかし、動作が行われる過程(c)は *ko iss-ta* 形式で到達点へ向かっての動作が進行していることを表わす。

- (51) *chelswu-nun hakkyo-ey ka-ko iss-ta* / *ka-go iss-ess-ta*

チョルスは学校へ行く・出来事の継続 / 行く・過去・出来事の継続
ha-ta 形式は段階[B]を一まとまり的に取り上げ、動作の終了とともに過程(b)の到達点に達し、主体が目標の位置変化を蒙ることを表わす。

- (52) *chelswu-nun hakkyo-ey ka-n-ta* / *ka-ss-ta*
 チョルスは 学校へ 行く / 行った

そして、*a iss-ta* 形式をとることによって、主体の位置変化の後の状態が継続していることを表わす。

- (53) *chelswu-nun hakkyo-ey ka iss-ta* / *ka iss-ess-ta*

チョルスは学校へ行っている / 行っていた

【3】瞬間的主変動詞

- (54) (*uysa-ka*)*toy-ta*((医者) になる)、*cuk-ta*(死ぬ)、*keylhonha-ta*(結婚する)、*ibwenha-ta*(入院する)...

瞬間的主変動詞は目標の変化点までの過程を表わすことができず、旧状態から新状態の境目だけを表わす動詞を指す。例えば、ある人が死ぬとは息をする状態から息をしない状態に変わる瞬間を表わす出来事である。そのため、漸次的変化のように、まだ死んでいない人を指して「ここまで死んだ」とはいえない出来事である。これは、現実世界の現象として死に近づいている主体の状態に何らかの働きかけによって変化が生じるとしてもその変化は「死ぬ」という動詞では表わせない領域の変化である。このような瞬間的变化は時間的幅の設定が不可能であって、日本語の主変動詞が持つアスペクト的構造と同じ構造を持っているといえる。そのため、変化の境目その時点だけを表わすため、点的限界を持つ出来事である。文法的にはまず開始限界を表わす *kisicakha-ta* 形式や、出来事の継続を表わす *ko iss-ta* 形式をとることは出来ない。そして、*ha-ta* 形式で段階[B]の変化の成立を表わす。

- (55) *chelswu-nun cuk-nun-ta* / *cuk-ess-ta*
 チョルスは 死ぬ / 死んだ

そして、*a iss-ta* 形式をとって、変化後の結果状態が継続している段階[C]を表わすことができる。

- (56) *chelswu-nun cuk-e iss-ta* / *cuk-e iss-ess-ta*
 チョルスは 死んでいる / 死んでいた

5 今後の課題

今回の発表では、特に工藤(1995)の理論を受け継ぎ、その中でも外的運動動詞だけに焦点を置いて分析したが、次のようにまだ未解決の問題も残っている。

①授受動詞の扱い：工藤(1995)では授受動詞を主客変動詞に分類しているが、これらの動詞がテイル形式をとって進行中の動作を表わすといえるか

- (57) 私は次郎にリンゴを上げている

②韓国語の再帰動詞の扱い：再帰動詞は日本語の場合、主変動詞に属するものでありながら、動作の側面を持っている動詞であると述べた。韓国語の場合も変化と動作の側面をともに持っているものとして扱えるものではある。しかし、問題は変化後の結果状態の継続を表わす場合も *ko iss-ta* 形式をとり、*a iss-ta* 形式はとらないのである

- (58) *chelswu-nun yangbok-ul ib-ko iss-ta*

チョルスは スーツを 着る・出来事の継続

- (59) (?)*chelswu-nun yangbok-ul ib-e iss-ta*

チョルスは スーツを 着る・結果継続

今後の課題として、これらの未解決の問題とともに、今回分析の対象としなかった内的情態動詞の語彙的な意味も対照分析することが求められる。また、これらの動詞分類が今後の補助動詞の意味・用法を分析するにあたり、どのように関わるのかを明確にすることが何よりも重要であろう。

【謝辞】

本研究は、平成17年度日本学術振興会科学研究費補助金(No. 15520241)の補助を受けて行われています。

【引用文献】

金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15
 (金田一春彦編(1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房に所収)
 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房